

一昨年秋、南ドイツを訪ねた際に、たまたまシュタイナー幼稚園を見学する機会を得た。文字通り、ルドルフ・シュタイナーの教育理論を実践する幼稚園だが、その理論と実践の根本に、個々の人間の成長を、人と人、人と環境との関係性の中から、丁寧に紡ぎ上げていく思想がうかがえ、なるほどと深い感慨を覚えた。

幼児期に子どもたちが身に付けるべきことは何か。生活の基礎、つまり人間が生きていくために不可欠の力を身に付けることだという考えがある。もちろん、表層的な技術をあれこれ教え込むわけではない。生きることの原点に立って、子ども自身が、個としての自分の存在とその周囲との関係を体験的に把握すること。言い換えれば、頭と心と体が全体となって生きるという実感を、生活とのつながりの中で体得すること。それが、幼児教育の第一の目標として設定されている。

そのためのプログラムが、実に丁寧に工夫されている。例えば、空間を感受する力を養うこと。そのために、木杵や木の実、綿や毛糸、毛皮や布など、自然素材からつくられた様々な小道具が遊び道具として用意されている。子どもたちは自然に遊びの中で居心地のよい空間のつくり方や、さまざまな素材の使い方や肌ざわりを体全体で学びとっていく。

また、自然の循環と身近な暮らしとの関わりを実感できるように、部屋の一角に季節のコーナーが設けられ、草花や野菜や果物や穀物など季節の恵みが飾られる。毎朝この季節のコーナーに集まり、蝋燭を灯したテーブルを囲み、静かに先生のお話を聞くところから、子どもたちの一日がスタートする。暮らしの一こまに、心を落ち着ける時間を持つこと、そのかけがえのなさを心身に刻んでほしいという願いも込めたひと時である。

秋になれば、小麦を刈って粉を挽く。収穫した小麦で決まった曜日にパンを焼いて食べる。お米を食べる曜日もある。月曜日の営み、火曜日の営み、水曜日の営み・・・と、生活パターンを繰り返しながら覚えていくことで、子どもたちは大人から指図されなくても、自分からやるべきことを考えて動くことができるようになるという。1クラスは20~25名で、3歳から7歳までの子どもが含まれる。年齢の異なる子どもが交じり合うことで、ともに助け合いながら生きる知恵を学んでいく。

生活の基礎を体得すること。かつてそれは、ごく自然に暮らしの中で学びとれるものだったかもしれない。けれど、今、私たちは暮らしの中で生活の基礎を伝える術を失いかけて、築き直す必要があるのだと。その切実さに、改めて気づかされる。